

ね、この本よんだ？



2013. 4～2014. 3



図書館で毎月発行している『としょかん通信』でご案内した
「あたらしい子どもの本」のリストです。

絵本、読みもの、テーマ本の三つの柱にわかれた
全部で60冊のブックガイドとなっており、
この一年、職員が手にとって選んだおすすめの本が
リストアップされています。

2008年度から始めて第6集になります。
紹介した本は、図書館で貸出ご利用いただけます。

このリストが、子どもたち、そして大人のみなさんにとっても
素敵な本との出会いのきっかけになりますように。



久留米市立中央図書館



区分	NDC分類	内容	タイトル		
絵本	913	日本の作品	『もしもしトンネル』		
			『おちやのじかん』		
			『こわがりやの しょうぼうしゃ ううくん』		
			『ペタン』		
			『たろうめいじんのたからもの』		
			『ぼくはねんちょうさん』		
			『それなら いい いえありますよ』		
			『やさしいかいじゅう』		
			『かぜフーホッホ』		
			『しろちゃんとはりちゃん』		
			『白い街 あったかい雪』		
			『ふろしきでんしゃ』		
			953	海外の作品	『ぼくはニコデム』
					『みならい騎士とブーツどろぼう』
『サーカスのあかちゃんぞう』					
『おばあちゃんのひみつのあくしゅ』					
『ありがとう、チュウ先生 わたしが絵かきになったわけ』					
『のせてのせて100かいだてのバス』					
『図書館に児童室ができた日 アン・キャロル・ムーアのものがたり』					
『ときめきのへや』					
『ゆきのうえ ゆきのした』					
『としょかんのよる』					
933	海外の作品	『ねこたちのてんごく』			
933		『よるのとしょかん』			
読みもの		913	日本の作品	『じゃんけんのすきな女の子』	
				『宇宙犬ハッチー』	
				『ネコをひろったリーナと ひろえなかったわたし』	
				『カフェ・デ・キリコ』	
				『アサギを呼ぶ声』	
				『ネバーギブアップ』	
				『サラの翼』	
				『声蚩(こえぼたる)』	
	『すすめ! 近藤くん』				
	『岳ちゃんは ロボットじゃない』				
	『官兵衛、駆ける』				
	『きっときみに届くと信じて』				
	933.7			海外の作品	『クレイジー・サマー』
					『モッキンバード』
『語りつぐ者』					
『象使いティンの戦争』					
『やさしい大おとこ』					
『あたしがおうちに帰る旅』					
『グリム童話全集 子どもと家庭のむかし話』					
『おいでフレック、ぼくのところに』					
『バイバイ、サマータイム』					
『14歳、ぼくらの疾走』					
933	海外の作品	『マッティのうそとほんとの物語』			
933		『ぼくはめいたんてい スウェーデンこくおうをすくえ!』			
テーマ本		552. 33		『舟をつくる』	
				『クモの巣図鑑-巣を見れば、クモの種類がわかる!』	
				『自分はバカかもしれないと思ったときに読む本』	
				『久留米のむかし話 2』	
				『美術館にもぐりこめ!』	
				『おどろきのスズメバチ』	
				『ブータンの学校に美術室をつくる』	
				『みな また、よみがえる』	
	『おばあちゃんをつくったよ! おいしいほしがき』				
	『キタキツネのおかあさん』				
	『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか。』				
	『ラズビアのねがい アフガニスタンの少女』				

『もしもしトンネル』
ひろかわさえこ／作・絵
ひさかたチャイルド

うさぎのナナちゃんのおとなりに、うさぎのロコちゃんがひっこしてきました。ナナちゃんとロコちゃんはすぐになかよくなり、まいにちいっしょにあそぶようになります。ところがある日、ナナちゃんはロコちゃんとけんかをしてしまいます。なかなかおりをしたいけど、どうしたらいいのか困ってしまったナナちゃんは、あることを思いつきました。さて、ナナちゃんはどやうやってなかなかおりのかな？かきねのトンネルがつなぐ素敵なおはなしです。

『おちやのじかん』
土橋とし子／作
佼成出版社

世界中どこにでも、「おちやのじかん」というのはあるもの。みんなでおいしいおかしをたべながら、おいしいお茶をのんで、わいわいはなして、ゆっくり、ほっこり。「おちやのじかん」っていいよね。そんな「おちやのじかん」に世界各地で楽しまれているいろいろなお茶を、めずらしい道具や、おかしとともにしょうかいします。アルゼンチンのマテ茶ってどんなかんじ？モロッコのミントティーは？さあ、あなたはどの「おちやのじかん」がすきかな？ぜんぶのんでみたくなるおいしいお茶の絵本です。

『こわがりやのしょうぼうしゃ ううくん』
戸田和代／作
にしかわおさむ／絵
ポプラ社

怖がり屋で小さな消防車ううくんは、本当は消防車になりたくなかったんです。火が嫌いで火事が怖いから。「今日も火事がありませんように」と、いつも小さな声で祈っています。それを仲間たちに笑われていたときに火事が起き、仲間たちは大急ぎで消火へ出かけて行きました。でも道が細くて仲間たちは通ることができません。ううくんじゃないとダメなんです。ううくんは仲間やまわりのみんなの声援の中、勇気を出して……。小さな消防車ううくんが大かつやくするお話です。

『ペッタン』
高部晴市／作
講談社

あるひ、ふうくんはびょういんへ行っていました。「がっこうへいきたくないんです。」すると、ツネキ先生、「どれどれ、おちゅうしゃしておきましょうか。」“ペッタン”。すると、ふうくんはなりたいた動物に大変身！うわさをききつけたこともたちが、ツネキ先生のところへやってきます。そのころ、こどもたちが学校にこなくてこまってしまった先生たちも、ツネキ先生のところへ。“ペッタンペタペタペッタンコ”。ゆかいなちゅうしゃのおはなしです。こんな楽しいちゅうしゃなら、みんなもやってみたいかな？

『たろうめいじんのたからもの』
こいでやすこ／作
福音館書店

いたちのちいといは、きれいなみどりいろの石をくびかざりにしています。泳ぎがうんとうまくなったらしるしに、たろうめいじんから、たからもの石をもらったのです。きつねのきっこも、石がもらいたくなって、川にとびこみますが、あれっ！！ きっこは泳げなかったのです。たろうめいじんのところで、どろんこ特訓、息をすってはいく特訓をがんばります。そして、ついに、すい〜。泳げるようになったきっこは、たろうめいじんに、川底のほらあなにつれていってもらい、一番奥にある石を泳いでとりに行くことに。きっこは、みどりの石をとってこれるかな？

『ぼくはねんちょうさん』
サトシン／作
田中六大／絵
小学館

ぼくはねんちょうさんの男の子。園で過ごす一日はいろいろなでき事がいっぱい！園までかけっこして行ったり、女の子のおままごとにつきあったり、砂場で遊んだあとはかいじゅうになって作ったおやまをこわしたりもするんだぞ！でも、そんな僕にも悩んでることや考えていることがいっぱいあるんだ。好きな女の子だって二人もいて、いちばん好きな子を決めるのも大変だ。ねんちょうさんだっているんなことを考えているんだぞ！この絵本は、ねんちょうさんの男の子がどんな気持ちで一日を過ごしているのか、男の子の視点で描かれた絵本です。

『それならいい いえ ありますよ』

澤野 秋文／作
講談社

なまけものの ぎんたの部屋はちらかりほうだい。ある朝、ぎんたは、のらねこの ちゃまるが 願いどおりの家を さがしてくれることをしり、自分にもかたづいて きれいないえを しょうかいしてくれるように たのみます。でも ちゃまるは なかなか きてくれません。それどころか、きたない家をさがしている おおぜいの ねずみたちを ぎんたのいえにつれてきたのです。さて、ぎんたは のぞみどおりの きれいないえに すむことができるのでしょうか？

『やさしいかいじゅう』

ひさまつまゆこ／さく・え
富山房インターナショナル

もりのなかのそのまたおくに、いっぴきのかいじゅうが おりました。まわりの どうぶつたちから きらわれ、まいにちなきながら くらしていた かいじゅうは、ある ひちいさなきのめと、ともだちになります。だけれか とすごすまいにちは、たのしく すぎていき、やがて かいじゅうの やさしさは、とある できごとを きっかけに、もりの どうぶつたちにも ひろがって いきます。これは、そんな やさしい かいじゅうの 心温まる おはなしです。

『かぜフーホッポ』

三宮麻由子／ぶん
斉藤俊行／え
福音館書店

かぜのおと、ファフォッ トッフア トッフア ファー。竹林の中で、竹に耳をあててみる。ヒュー ホー ゴガン コーン ツタトーン ゴン コン。おにいちゃん と行った 散歩で、さまざまな 風の音に 出会います。風が見える、風がきこえる 絵本です。あなたも 風を感じて みませんか？

『しろちゃんとはりちゃん』

たしろちさと／作・絵
ひかりのくに

しろちゃん とはりちゃんは 大の仲よし。絵本を読むときも おさんぽへ 出かけるときも いつも いっしょです。そんな 二人が、あるとき 夜ごはん にカレーをつくることに したのですが、なにカレーにするか で大げんか！ おこった はりちゃんは 家を出て 行ってしまいました。二人は 仲なおりで できるのでしょうか。

『白い街 あったかい雪』

鎌田實／作
小林豊／絵
ポプラ社

チェルノブイリ原発事故後、隣国のベラルーシでは 多くの子どもたちが 病気に 苦しんで いました。つらい 治療で 食事が とれない 少年 アンドレイのため、マイナス20度の 街で パイナップルを 探し続ける 日本人 看護師。その姿が 人々の 優しい 気持ちをつなぎ、小さな 奇跡を 起こす 現地で 病氣と 闘う 医師の 書いた 実話です。

『ふろしきでんしゃ』

山崎克己／作
BL出版

でんしゃの しゃこに 入って いった おばあさんを見て いると、なんと ふろしきでんしゃに だいへんしん！ びっくりした ハルタくんは、おばあさんの あとについて きます。すると、ふろしきでんしゃの 中から おりてきた お客さんたちは、みんな 楽しそう。ふろしきでんしゃの中には、一体 なにが あるのでしょうか？

『ぼくはニコテム』
 アニエス・ラロッシュ／作
 ステファニー・オグソー／絵
 野坂悦子／訳
 光村教育図書

まちであしがぶつかってくるたびに、学校でいじわるされるたびに、先生にしかられるたびに、ニコテムは思います。よしっ、へんしんするぞ…！ものすこーくおおきくなって、ものすこーくつよいスーパーニコテムになって見返してやる。でもね、ここにいるのはおおきくもなく、つよくもないニコテムなんです。だから……。変わりたいと思った男の子が、今の自分と向き合って頑張り、誰かに認めてもらう。そんなうれしさを描いた絵本です。

『みならい騎士とブーツどろぼう』
 クエンティン・ブレイク／作
 谷川俊太郎／訳
 好学社

みならい騎士のスナッフは、剣も使えないし、ダンスもだめ、おじぎもできないし、ねずみにかじられたブーツのつぎもあてられない。だめだめづくして、騎士になれる日は……。？気が遠くなりそう。そんなスナッフが、師匠の騎士サー・トーマスと、ブーツつくりの小屋をたずねると、ブーツどろぼうにおそわれてこまりきっていた。ブーツつくりがつくったたくさんのすてきなブーツをみたスナッフは、とってもいいことを思いついて……。だめだめスナッフ大かつやくのおはなしです。

『サーカスのあかちゃんぞう』
 モード&ミスカ・ピーターシャム／作
 こみやゆう／訳
 長崎出版

サーカスのお母さん象と赤ちゃん象はとても仲よし。お母さん象は、ピエロのゾンビさん一家の様子が気になって仕方がありません。ゾンビさんの住まいのテントをのぞいていたお母さん象は、ゾンビさんの子どものように、赤ちゃん象にお行儀よく食事をさせたいと考え、ゾンビさんのテントへ忍び込みます。そして子ども用の椅子に赤ちゃん象を座らせ、人間のように食事をさせようと思いますが、仕事を終えたゾンビさん一家が戻って来て…。思わずにっこりしてしまう結末です。

『おばあちゃんのひみつのあくしゅ』
 ケイト・クライス／作
 M・サラ・クライス／絵
 福本友美子／訳
 徳間書店

これはラリーとおばあちゃん、ふたりだけのひみつのあくしゅ。きゅっ、きゅっ、きゅっ。「だい・すき・よ、っていういみよ」だけどラリーは、おばあちゃんといっしょにいたくありません。ところがおばあちゃんがきたあるひ、ラリーのすむ「ひつじがおか」になつのであらしがやってきて……。知らなかったおばあちゃんの一面を知っていき、大好きなおばあちゃんへと変わっていく。あたたかい素直な気持ちが贈る、大好きがつまったおはなしです。

『ありがとう、チュウ先生
 わたしが絵かきになったわけ』
 パトリシア・ポラッコ／作
 さくまゆみこ／訳

字を読むのに時間がかかるパトリシア。ものの見方が他の人と違うのだ。でも、パトリシアは「生まれながらの絵かき」だった。その才能に気がつき、それをのばす道筋をつけてくれたドノバン先生。先生は、勉強はよくわかっていることも理解してくれていた。絵の才能を認め、それを伸ばし、苦手な「読み」を克服することにも力をつくしてくれた、美術教室のチュウ先生。いろいろな人に助けられながら画家への道を歩きはじめた作者自身の子どもの頃のお話です。字を読めるようにしてくれた「ありがとう、フォルカーせんせい」という本もあります。

『のせてのせて100かいだてのバス』
 マイク・スミス／作
 ふしみみさを／訳
 ポプラ社

主人公は赤いバスの運転手さん。いつものように紅茶を飲んで、上着を着てバスに乗りこみます。でも、毎日毎日同じことのくりかえしでもううんざりです。そんなある時『あの道はどこまで続いているんだろう』と運転中にふと思い、なんといつもと違う道に入ってしまった。バスはどこまでもどこまでも進んでいきます。道がなくなってもフェリーに乗って海を渡ったり、お客さんがいっぱいになってもバスを何階だてにも作ってどんどん進んでいきます。バスはどこまで進んで行くの？そして、バスはどこまで大きくなっちゃうの？

『図書館に児童室ができた日
アン・キャロル・ムーアのものがたり』
ジャン・ピンボロー／文
デビー・アトウェル／絵
張替恵子／訳
徳間書店

むかし、アメリカの小さな町に、自分の考えをしっかりと持った女の子がいました。名前はアン。女の子が自分の思うとおりに生きるのはむずかしい時代でしたが、アンは自分の考えでニューヨークへ行き、勉強し、図書館ではたらき始めます。そして、それまでになかった「児童室」をつくり、子どもたちが自分で本を選び、本を借りられるようにしたのです。その考えは広まり、たくさんの国の図書館にも児童室がつけられるようになりました。これはほんとうにあったお話です。

『ときめきのへや』
セルジオ・レッツィア／作
福本友美子／訳
講談社

モリネズミのピウス・ペローシは、ものをあつめるのがだいすき。いろんなものをひろってはもちかえり、「ときめきのへや」にかざります。いろんなひとがたからものをほめるなかで、ひとつだけだれもがくびをかしげるものがありました。それははじめてみつけて、ときめきのへやにかざりたいところです。しかし、みんなつまらないものだといわれるうちに、とうとうピウスはそのいしをすててしまいます。すると…。それがあつてまいにちがかがやいてくる、そんなたからものをもつよるこびを描いた一冊です。

『ゆきのうえ ゆきのした』
ケイト・メスナー／文
クリストファー・サイラス・ニール／絵
小梨直／訳
福音館書店

雪の上を、すいすい。つめたい、まっしろな森の中へ、スキーで入っていくと、どこも雪におおわれていて、シーンとしている。でも何もいないわけじゃない。雪の下にはまったく別の秘密の世界があるのです。雪と地面の間のすきまで、動き回っている動物たちのくらしを、こっそりのぞいてみませんか？

『としょかんのよる』
ローレンツ・パウリ／文
カトリーン・シェラー／絵
若松宣子／訳
ほるぷ出版

ある日の夕方、キツネがネズミを追いかけていると、紙と人間のにおいのするしずかなところに迷いこみました。そこは大きな図書館でたくさんの本が並んでいます。本を読んだことのないキツネは、ネズミに図書館のことを教えてもらいながら、夜な夜な図書館に忍び込みます。読むと思わず図書館に行きたくなる絵本です。

『ねこたちのてんごく』
シンシア・ライラント／作・絵
まえざわあきえ／訳
ひさかたチャイルド

ねこたちはこの世に別れを告げた後、気持ちのよい道を楽しみながら天国へ行きます。そこでは天使や神様が優しく出迎え、大切に世話してくれます。ねこたちは幸せに暮らしながら、大好きだった人たちを静かに見ていることもあります。ねこ好きの方は必見、そうでない方も。心がいやされる本です。

『よるのとしょかん』
カズノ・コハラ／作
石津ちひろ／訳
光村教育図書

「かいかんじかん、まよなかからよあけまで」。よるだけあいているこのとしょかんでは、カーリーナというおんなのこと、3わのふくろうがはたらいています。ちょっとしたトラブルもあるけれど、だいじょうぶ。カーリーナたちが、としょかんのつかいかたをおしえながら、かいつつしてくれます。しずかなしずかな、よるのとしょかんのおはなしです。

『じゃんけんのすきな女の子』

松岡享子／作
大社玲子／絵
学研

あるところに、とてもじゃんけんのすきな女の子がいました。だれとでも、なにをきめるにもじゃんけん。お母さんに「はをみがきなさい」といわれても、「じゃんけん。おかあさんがかったら、みがいてあげる」というしまつ。すっかりはらをたてたお父さんとお母さんに、「じゃんけんできめていいことと、わるいことがあります」といわれますが、「そんなことないもん」と相手にしません。ある日、大きなねこが家に来て、じゃんけんをしようと言います。そのじゃんけんで、女の子のお父さんとお母さんが、ねこ女の子のどちらのお父さんとお母さんか決めよう、というのです。さあ、勝負のゆくえは、、、？

『宇宙犬ハッチー』

かわせひろし／作
杉田比呂美／絵
岩崎書店

ある夏の日、ぼくは犬と出会った。どこからどう見てもかわいい子犬の姿をしたそいつは、しゃべりはじめたうえに、よく見ると服を着て二本足で立っていた。なんと宇宙からやってきた宇宙人だって！宇宙船が壊れて身動きできない宇宙犬のハッチーは、応援が助けに来るまで友樹の家で世話になることに。さらに宇宙から逃げてきた凶悪な犯罪者が地球にいることがわかり、二人は一緒に立ち向かう。ぼくと宇宙人の冒険と友情の物語。

『ネコをひろったリーナと
ひろわなかったわたし』

ときありえ／著
平澤朋子／絵

主人公の里菜子はピアノが大好きな小学校6年生の女の子。最高学年になり、大好きなピアノを続けるため音楽学校を受験するか自分の進路に悩みます。そんなある日、ピアノ教室の近くにある“バラの家”でリーナという幼い女の子と出会います。その子はかつて里菜子が拾わなかった黒い捨て猫を飼っていました。自分の進路や口論の増えた両親のことなど、不安におしつぶされそうになった里菜子は、ある夜家を抜け出し黒ネコにみちびかれ“バラの家”を目指します。自分の心の“声”に耳をすまし、自分と向き合う1冊です。

『カフェ・デ・キリコ』

佐藤まどか／著
講談社

中学2年生の霧子はイタリア人の父を亡くし、日本人の母と二人で父の故郷であるミラノへ移住した。そして亡くなった祖父の残したギャラリー・カフェを継ぐことに。慣れないミラノでの生活で、霧子の心の拠り所となった、隣家のバジリコ兄弟が抱える複雑な家庭環境。毎日カフェに来る老人。ずっと抱えていた母への葛藤。愛すること・忘れること・そして許すことは人生の三つの試練。家族とは？ イタリア在住の著者が、重厚なテーマをさらりと爽やかに描いた、少女の成長の物語です。

『アサギを呼ぶ声』

森川成美／作
スカイエマ／絵
偕成社

「おまえ戦士になりたいのか」。アサギの村では十二歳になると、女は女屋に入り結婚のための準備を、男は男屋に入り村を守る戦士となるための修行をそれぞれ行う。しかし、女の身でありながら戦士になりたいアサギは、掟を破り、ハヤという戦士から教えを受けながら、一つの賭けに出る。どうなるかはわからない。どうしていいのかもわからない。だが、はじめることはできるではないか。それがなんだかわからなくても。強く生きる少女の明日へと向かう物語。

『ネバーギブアップ』

くすのきしげのり／作
山本孝／絵
小学館

ジュンのクラスでは、うでずもうが大人気。担任の山下先生がうでずもうがとても強くて、「鉄腕」や、「ジャイアント」、「トルネード」や、「マシンガン」なんていろいろなワザを教えてくれたからだ。休み時間になると、クラスのあちこちでうでずもうが始まる。うでずもうが弱いジュンにとって、それがゆうつつたまらないのだ。それなのに、クラスのイベントで「うでずもう大会」をやることに決まってしまった。ジュンは先生と一緒に秘密のトレーニングをすることになるが、先生のいう「続ける力」を信じて、ジュンはがんばることができるのか？

『サラの翼』
稲葉なおと／著
講談社

主人公はもうすぐ11歳の誕生日を迎える女の子のサラ。お母さんとの突然の別れで悲しい日々を過ごしていました。そんなある日、おばあちゃんに旅に出ないかと言われます。でも、一緒に旅に出るのはおばあちゃんではなく、お母さんの古くから友人というコウと名乗る日本人のおじさんです。このおじさんときたら英語は全然話せないし、いいかげんなことばかり言うし、サラは今回の旅に不安を抱きます。二人の旅はどうなってしまうのでしょうか。

『声蛩（こえぼたる）』
万乃華れん／作
丹地陽子／絵
岩崎書店

ニューヨークへ行くおじさんに、頼んで買ってきてもらったヤンキースの帽子。陽平は嬉しくてたまらない。ところが陽平の大切な帽子に、カラスがフンを落としたのだ。許さない！ そう思った陽平だが、フンの中から不思議なものが…。あくる日から、親友の幸太郎と二人でカラス探しを始め。ついに見つけた。二人でカラスを追いかけて、たどりついた先には大きな家があった。その家の奥には森があり、先に進むと、赤や青の光をはなつ宝石のような玉が、数え切れないほどたくさんゆったりとさまよっていた。この不思議な光景の中、陽平たちは？ 少年たちの心の成長を描く物語。

『すすめ！近藤くん』
最上一平／作
かつらこ／絵
WAVE出版

近藤くんは、いつもさわがしい元気いっぱいの子。ぶっきらぼうなあいちゃん、人をよせつけない感じの女の子。そんなあいちゃんを喜ばせようと、近藤くんが持ってきたものが、大変な騒動を引き起こします。おさわがせな近藤くんと、ぶっきらぼうなあいちゃんのコンビが贈る元気いっぱいのおはなしです！

『岳ちゃんは ロボットじゃない』
三輪裕子／作
福田岩緒／絵

おさななじみの岳ちゃんは背が高くても力も強い。スポーツも勉強もできるし、大好きな生きものの研究にも熱心だった。でも、おとなしい性格で、元気のいいサッカー部の子たちの言うとおりにになってしまう。「岳ちゃんはロボットじゃない！」いやと言えない岳ちゃんに、草平は、じれったく思いますが……。

『官兵衛、駆ける。』
吉橋通夫／作
講談社

「戦わずして勝つ」という戦法で、生涯一度も負けなかったという黒田官兵衛。戦国時代きっての天才軍師と呼ばれ、戦乱の世を動かした織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に重用され、独自の戦法で勝利へと導きます。そんな官兵衛の原点を読みとくことのできる一冊です。

『きつときみに届くと信じて』
吉富多美／作
金の星社

倉沢海は内気でバレーの得意な中学生。友人の晴香からいじめを受けるようになり、つらい日々を過ごしていた。チームメイトの存在だけが海を支えてくれていた。でも真実は…。心の支えを失った海は、ラジオ番組に「死のうと思ひます」とSOSを送った。海を守ろうとする大人たちの願いは届くのか？ 思わず涙がこぼれるお話です。

『クレイジー・サマー』

リタ・ウィリアムズ＝ガルシア／作

代田亜香子／訳

すずき出版

目立ちたがり屋でおませな次女のヴォネッタ、いざとなると勇敢な末っ子のファーン。そして11歳の長女デルフィーンは、いつも妹たちのめんどうをみることを最優先するけなげなしっかりもの。ファーンがまだミルクを飲んでいる頃に出て行って、ずっとあっていないお母さんに、この夏三人だけであいにいくことになった。キング牧師が暗殺された年、まだ人種差別が明らかに存在していた時代に、カリフォルニア州オークランドで、黒人の三姉妹が、「どうかしてる」母親のセシルとはじめてすごす、「どうかしてる」夏の体験物語。

『モッキンバード』

キャスリン・アースキン／作

今井ちひろ／絵

ニキリコン／訳

アスペルガー症候群のケイトリンは、いつも頼りにしていたお兄ちゃんをとある事件で失ってしまう。アメリカの小さな町の中学校で起きた乱射事件。それは、家族を亡くしたケイトリンや他の子をはじめ、まち全体に大きな傷跡を残していた。そんな中、「区切り」というものが、誰かが死んだ後で見つけると気持ちが楽になるものだと知ったケイトリンは、「区切り」がどこにあるのか探し始める。他人と接することが苦手で、共感することが出来ない少女が、「区切り」を探していくうちに少しずつ周りの人と関わり成長していく物語。

『語りつく者』

パトリシア・ライリー・ギフ／作

もりうちすみこ／訳

さ・え・ら書房

ほとんど会った事のないリビーおばさんに、預けられる事になったエリザベス。気づまりなおばさんの家で、自分そっくりの少女ズイーの肖像画に出会います。ズイーは、200年以上前の羊皮紙に描かれた、エリザベスの祖先。ズイーにぐんぐん惹かれていったエリザベスは、羊皮紙に書かれた凶の謎を解きながら、アメリカ独立戦争の中を生き抜いたズイーの生きざまに迫っていきます。現在の日常を生きるエリザベスと、植民地だったアメリカが、イギリスから独立しようとしていた激動の時代に生きるズイーの、劇的な出会いの物語。

『象使いティンの戦争』

シンシア・カドハタ

代田亜香子／訳

作品社

主人公はラーデ族の象使いの少年ティン。ベトナム高地の森にたたく静かな村で、おだやかに暮らしていました。ティンにはレティという象がいて、レティのお世話をすることが何よりの幸せでした。そんなある日、ティンの暮らす村も戦争に巻き込まれてしまいます。生まれた時から自分の国が戦争をしていることは知っていても、ティンの村は平和だったので戦争がどういうものなのか、なぜ戦争をしなければならないのか、ティンにはわかりせん。ティンと象のレティはどうなるのでしょうか。ベトナム戦争という大きな戦争に巻き込まれた少数民族、ラーデ族の視点から描かれたお話です。

『やさしい大おとこ』

ルイス・スロポドキン／作・絵

こみやゆう／訳

徳間書店

昔、高い山のとっぺんに大きな黒いお城があり、大おとこがひとりぼっちで住んでいました。大おとこはふもとの村人と友だちになりたいと思っていましたが、大おとこの声は大きすぎて、誰もまともに聞くことができません。それに目を付けたのが、悪いまほう使い。まほう使いのウソのせいで、やさしい大おとこは、わるものにされてしまいます。でもある日、かしい女の子グエンドリンはまほう使いのウソに気がつき、大おとこと友だちになるのです。グエンドリンを信じた村長が、まほう使いにしかけたワナは？ そして大おとこは願いどおり村人となかよくなれるのでしょうか？

『あたしがおうちに帰る旅』

ニコラ・デイビス／作

代田亜香子／訳

小学館

「イヌ」はペットショップで住みこみではたらかされている人間の女の子。ある日ペットショップにコンゴウインコのカルロスがやってきてから、イヌの周りは少しずつ変わっていきます。そんな中、ともだちのハナグマ、エズミが売られそうになり、カルロスに導かれてイヌとエズミは、ペットショップから逃げ出します。カルロスがかえろうという「おうち」とは？言葉もなくした少女が、たどり着いた先で大切なものをとりもどし、自分にとっての「おうち」を見つける物語。

『グリム童話全集 子どもと家庭のむかし話』

グリム兄弟／編

シャルロット・デマトーン／絵

橋本孝・天沼春樹／訳

今年、グリム童話が初めて本になって200周年になりました。160の国の言葉に訳されて、世界中で、聖書の次にたくさんの人に読まれています。「シンデレラ」や「白雪姫」、「赤ずきん」など、みなさんもよく知っているおはなしだと思います。でも、ちょっと待って下さい。みなさんが知っているその「シンデレラ」や「赤ずきん」は本当のグリムのおはなしですか？「えっ？」と思った方も、思わなかった方も、もう一度グリム童話を読みなおしてみませんか？

『おいでフレック、ほくのところに』

エヴァ・イボットソン／作

三辺律子／訳

偕成社

この物語の主人公である少年ハルは、犬と一緒に過ごすことを長い間夢見ていました。しかし、お母さんは大のきれい好きなので、犬を飼うことをなかなか許してはくれません。それだけでなくお母さんは「年頃の男の子が欲しいものは全て与えているのだからわがママをいわないの」とハルに言います。でも、そんなものはハルが本当に望んで買ってもらったわけではありません。ハルが本当に望むのは犬と一緒に過ごすことです。そんなハルの姿をみたお父さんは、ある日ハルに犬を探しにいこうと言いますが…。はたしてハルの長い間夢見ていた願いはほんとうにかなうのでしょうか。

『バイバイ、サマータイム』

エドワード・ホーガン／作

安達まみ／訳

岩波書店

両親の離婚で心に傷をおったダニエルは、とうさんと二人で滞在型のスポーツリゾートへ休暇にやってくる。そこでダニエルは不思議な少女レキシシーと出会い、彼女に心を開いていく。だが彼女には恐ろしい秘密があった。レキシシーを苦しみから救いたいダニエルは危険の中に…。怖い本が好きなお人にお薦めです。

『14歳、ほくらの疾走』

ヴルフガング・ヘルンドルフ／作

ミヒャエル・ソーヴァ／絵

木本栄／訳

小峰書店

退屈な毎日に、ある日ひょっこりとやってきた転校生、チック。どう見ても彼はふつうじゃない。そんな彼にいつの間にか振り回され、巻き込まれながら、14歳の夏、マイクはチックと二人でフラキアへと向かって盗んだ車で旅に出ます。ドイツで児童文学賞を受賞するなどの根強い人気を誇る、彼らの最高の夏の物語。

『マッティのうそとほんとの物語』

ザラー・ナオウラ／作

森川弘子／訳

岩波書店

マッティは、大人のうそが許せない小学5年生。弟のサミは、幼稚園児。パパは、無口なフィンランド人。ママは、エネルギーが豊富なドイツ人。みんな湖のほとりの一軒家にあこがれています。でも今は、仕事もお金も家も失って湖のほとりの草むらに家族四人座り込んでいるのです。家族の願いがかなうまでの波乱万丈の愉快なお話。

『ぼくはめいたんてい』

スウェーデンこくおうをすくえ！』

マージョリー・W・シャーマット／文

マーク・シーモント／絵

小宮由／訳

ネートはどんな事件も解決する名探偵です。ある日、北欧へ家族旅行にでかけた友だちのロザモンドから手紙が届きます。内容は旅行中になくしたあるものをさがしてほしいとのこと。手がかりはロザモンドからの手紙と写真だけです。解決できなかったらロザモンドはスウェーデン国王に言いつけると言うし…。はたしてネートはこの事件を解決することができるのでしょうか？

『舟をつくる』

関野吉晴／監修・写真
前田次郎／文
徳間書店

みなさんは、舟ってどうやって作るか知っていますか？この本は、何も無い状態から道具までも手作りして舟を作り上げる過程が書かれています。舟といっても、昔使われていた「丸木舟」という舟です。材料は自然のものを使います。砂鉄を集めて木炭を作り、工具の素材となる鋼を作ります。そうして鍛えられた鋼は、オノやナタなどの工具になるのです。その工具で木を切り倒し、くり抜いていきます。ほら、どんどん形になってきました。こうやって作るんだ！！という感動の一冊です。あなたも挑戦してみますか？

『クモの巣図鑑』

一巣を見れば、クモの種類がわかる！』
新海明／著
谷川明男／写真

家のまわりなど、いろいろな場所でよくみかけるクモの巣。このクモの巣をよーく観察したことはありませんか？実はクモの巣はクモの種類によって、さまざまな形があり、形がちがうとえさになる虫の種類も、つかまえかたもちがうのです。この本では、身近に見られる約40種類のクモの巣を円形・ドーム形・ハンモック形をはじめ、7つの形に分類し、巣の写真とともにくわしく紹介します。クモがせっせと作り上げる芸術作品のようなクモの巣の不思議な世界が楽しめる1冊です。

『自分はバカかもしれないと思ったときに読む本』

竹内薫／著
河出書房新社

「自分はバカかもしれない」と悩んでいる、思ってしまったらみなさん。ぜひこの本を手にとってみてください。自分はバカだから勉強ができない・・・という話から、カタイあたまとやわらかいあまの話、バカをこじらせない秘訣まで。頑張っているのになかなか成果が出ないのは？という悩みにはグラフや数字を用いてわかりやすく解説をしています。この本を読めば、視界が開けて身近なものや新しいことにもっと手をのばしてみたくなるかもしれません。

『久留米のむかし話 2』

久留米のむかし話編集委員会／編
鶴陽会久留米支会

これは、わたしたちのまち、久留米のむかし話を、探し集めて本にしたものです。3年前に第1巻が出版され、今回、第2巻ができました。久留米のいろいろな所のむかし話がのっています。たとえば、この図書館の近くに「湯の坂」という温泉がありますね。この温泉には、雲助さんという心やさしくて、信心深い男の人が、毎月お参りしていた高良大社へ行く途中で、キツネにだまされたおかげで見つかったというおもしろい話があるそうです。ほかに、きっと「あっ、あそこのことだ！」と思わず声をあげたくなる身近な場所のお話があると思いますよ。

『美術館にもぐりこめ！』

さがらあつこ／文
さげさかのり／絵
福音館書店

皆さんは美術館に入ったことはありますか？外国の絵や不思議なオブジェがたくさん飾られていますよ。でもそれは美術館のほんの一部だけで、実は皆さんの知らない美術館の裏の世界があるんですよ。たとえば、美術館の絵はいつでもみることができる『じよっせつ展』と、期間を決めて絵を展示する『企画展』の大きく二つに分けられます。企画展の絵は世界中の美術館から集めるのですが、さあ、どこにうやうややく大切な絵を運ぶのでしょうか。いつも目にすることのない美術館の裏方のお仕事や、美術館のしくみについて知ることのできる絵本です。

『おどろきのスズメバチ』

中村雅雄／文
講談社

みなさんはスズメバチと聞くと何を想像しますか？この本にはスズメバチの女王が一匹で巣作りを始めるところから、だんだんと仲間が増え、巣が大きくなってコロニーが繁栄していく様子が詳しく説明されています。そして冬が訪れる前に、次の女王バチに命が受け継がれていく様子も…。スズメバチは怖いというイメージがありますが、どんな生き物も食物連鎖という自然のいとなみの中ではよく生きていくことができるメンバース。怖がるだけではなくスズメバチの生態を知り、出会ったときに対処できるような知識を身につけましょう。意外な発見があるかもしれませんよ。

『ブータンの学校に美術室をつくる』

榎本智恵子／著
WAVE出版

世界一幸福な国といわれるブータン。このお話は、そのブータンに八つある障害者支援学校の一つで唯一のろう学校（耳のきこえにくい子どものための学校）で、青年海外協力隊として美術をおしえにいった日本人のおはなしです。ブータンってどんなくにだるう？美術を教えることで彼女が見てきた少し違った角度から見たブータンを紹介します。日本とは違う価値観や感覚に戸惑いながらも、彼女が美術教師として、ブータンの子どもたちと過ごした2年間の物語。

『みな また、よみがえる』

尾崎たまき／写真・文
新日本出版社

「公害の原点」と言われる水俣病。チッソ工場の流した水銀が、海を汚し、魚や生きものを殺し、人間の体をむしばんだ。「魚（いお）わく海」と呼ばれた豊かな水俣の海に、水銀のまざったヘドロがたまり、魚たちの体にも水銀がたくさん入って、食べてはいけない「汚か魚」になってしまった。そんな水俣の海と人びとが、何十年もの時間をかけて、元気をとりもどしていく姿を、水俣の海に浮かぶ「恋路島」が語ります。表紙の魚のむれは、まさに「魚（いお）わく海」。大迫力です。10月に熊本で「水銀に関する水俣条約外交会議」が開催されました。この機会に水俣のことを考えてみませんか？

『おばあちゃんをつくったよ
おいしいほしがき』

細川剛／写真
宇部京子／文

そのまま食べたらしぶいしぶがきも、おひさまが当たる風通しのよいところに干せば甘くなります。この絵本では、おばあちゃんとぼくとでほしがきをいちからつくります。写真と一緒に作り方ものっているので、みなさんもお家の人とつくってみてはいかがでしょうか。

『キタキツネのおかあさん』

竹田津実／文・写真
福音館書店

北海道に住んでいる獣医師が記録したキタキツネのお母さんの写真絵本です。自分の娘たちと一緒に子育てをしている大家族の写真がほほえましく、母の愛情が伝わってきます。厳しい自然の中、命が次の世代に受け継がれていく様子が描かれています。「キタキツネのおとうさん」とあわせて読んでみてください。

『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか』

石井光太／文
ポプラ社

「なぜ学校へ行くのか」。みなさんは考えたことがありますか？多くの子どもたちにとって、一度は疑問に思ったことがある質問かもしれません。この本はその疑問を、マララ・ユスフザイさんの言葉を通して考える一冊です。マララさんは、教育を受ける権利を主張しつづけ、武装グループによって銃で撃たれました。学校へ行って教育を受けるということがどういうことなのか、一緒に、彼女の言葉から考えてみませんか？

『ラズィアのねがい アフガニスタンの少女』

エリザベス・サナビエー／文
スアナ・ヴェレルスト／絵
もりうちすみこ／訳
汐文社

ラズィアの住む村に、女の子の学校ができることになりました。今まで女の子は学校に行けなかったのです。ラズィアはどうしても学校に行きたいのですが、お父さんやお兄さんは、許してくれません……。女性が教育を受けることの大切さを訴えるために、実在の人物であるラズィア・ジャン先生が建てた学校でのお話です。